

大和高田市

～「笑顔の花咲くまち 大和高田」みんなが笑顔で暮らせるまちへ～

奈良県北西部に位置する大和高田市は、1948年に県下2番目の市として市制を施行しました。かつて全国各地から労働者が集まる大きな紡績工場があり、商店街は多くの人が賑わいました。しかし「商都たかだ」と呼ばれた同市も1995年をピークに人口は減少に転じ、少子高齢化も進んでいます。市はこうした課題解決に向け、公共施設を集約化したシビックコア地区の整備を進め、市民の利便性向上と賑わいのあるまちづくりに取り組んでいます。

I 概要

1. 地理と歴史

大和高田市は、奈良県北西部に位置する人口61,744人（県内39市町村中7位）、世帯数26,095世帯（同6位）、面積16.48km²（同30位）の市である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2020年））。同市は市制及び町村制の施行により1889年、高田町となり、1948年に周辺の村を編入し、県下2番目の市として現在の姿となった。

同市北部に位置する標高70m～80mの馬見丘陵の他はほぼ平坦な地形で、市域を高田川や葛城川が南北に流れている。

江戸時代には、「商都たかだ」の礎となる小売商・卸問屋ができ、農業では、同市のメリヤス・靴下製造や紡績などの繊維工業発展の基礎となる大和木綿の栽培が盛んになった。また、同市は古くから交通の要衝として、奈良県中和地域の経済・文化・行政の中核として発展し、大阪との文化・経済的な関わりも深い。

JR和歌山線・桜井線（万葉まほろば線）高田駅、近鉄大阪線大和高田駅、近鉄南大阪線高田市駅を中心に市街地が形成され、大阪都市

圏へ30分程度で連絡する好立地から、大阪のベッドタウンとしての役割も担っている。

2. 産業構造

従業地による就業者人口（15歳以上）の産業別割合を見ると、第1次産業が1.1%、第2次産業が26.0%、第3次産業が72.9%と、奈良県全体（順に3.4%、22.2%、74.4%）と比べて第2次産業のウエイトが高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。

民営事業所数は2,275か所（県内7位）で従業者数は17,954人（同6位）。（総務省・経済産業省「経済センサス活動調査」（2016年））。同市の産業構造を従業者特化係数※でみると、「ガス業」（13.2）、「繊維工業」（10.3）、「保健衛生」（4.7）、「プラスチック製品製造業」（3.2）、「繊維・衣服等卸売業」（3.1）の順となる。（総務省「地域の産業・雇用創造チャート」）

※特化係数は、地域のある産業がどれだけ特化しているかを見る係数。1以上であれば特化していると考えられ、数値が大きいほど特化度合いが高い。

3. 人口構造

年齢階級別人口移動を見ると、男女ともに全ての年代において転出が転入を上回っている。特に20歳代、30歳代の転出超過が大きくなっている。進学・就職・結婚などの移動を伴うライフイベントが主な要因であると考えられる。（総務省「国勢調査 移動人口の男女・年齢等集計」（2015年））



II 市の活性化に向けた様々な取組み

同市ではこうした現状を踏まえると併に、従来の総合計画に代え、2027年度を目標とした「大和高田市まちづくりの指針」を策定した。これまでの総合計画では、前期5年・後期5年の10年計画であった計画期間を、市長任期と同様の4年毎の8年計画とし、急激な社会情勢の変化にも柔軟かつ迅速に対応できるように変更した。

1. 都市機能にかかる取組み

○公共施設を集約化したシビックコア地区の整備

かつては「商都たかだ」と称され人口増加を続けていた同市も年々人口減少が進み、少子高齢化、市街地の空洞化が課題となっていた。このような状況にあって、同市は市役所を中心とした地区をシビックコア地区として位置づけ、持続可能な都市経営を目指したまちづくりを推進するため、2015年7月奈良県との間で「奈良県と大和高田市のまちづくりに関する包括協定」を締結した。

同市は、本協定を受け「大和高田の都市機能の集積とにぎやかな交流拠点のシビックコア」をコンセプトとし、市民にとって利便性の向上につながる生活空間の実現を図る。中心市街地に医療・福祉・商業などの都市機能を担う施設を集約し、人口減少社会においても一定の人口密度を保つコンパクトなまちづくりを目指し取り組んでいる。

○「ZEB Ready」を達成した新庁舎が完成

同市の庁舎は、1963年に建設されて以降、市の拠点として重要な役割を果たしてきたが、老朽化、耐震性不足や狭隘化したため建替えられることになり、2021年7月に新庁舎が開庁した。

新庁舎は、鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）6階建てで、災害時の防災拠点として機能させるために、免震構造が採用された。また、環境に配慮した施設で、屋上に太陽光パネルを設置するほか、省エネ技術で50%以上の一次エネルギー消費量を削減する「ZEB Ready」を達成した、県内で初めての庁舎である。

延床面積10,251m²（旧庁舎の約1.5倍）の施設

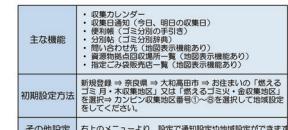
内には、用事がなくてもこの施設に立ち寄れるよう、市民サロンや多目的スペースなどが新たに設けられた。この多目的スペースの壁面や天井、配置された家具には県産材が使用されている。



新庁舎の全景（左上）県産材が使われた多目的スペース（左）市マスコット「みくちゃん」（右上）

○ごみの減量・再資源化を推進し、10市町村共同で新ごみ処理施設の整備を進める

同市では、2006年4月よりごみの減量・再資源化を推進することを目的に、分別の徹底及びごみ収集の有料化を実施している。一般家庭ごみの「指定ごみ袋」の購入や、「粗大ごみ整理券」の取扱店での購入などの取組みにより、ごみの量は有料化前よりも約15%の減量を達成した。また同市ではさらなる推進のため、新たに「ごみ減量大作戦」を2017年9月から2021年3月まで実施した。



「さんあ～る®」の画面イメージ

ごみ収集日や分別・処分方法など、ごみの減量に関する情報は、ごみ分別アプリ「さんあ～る®」にて配信している。スマートフォンやタブレット端末で専用のアプリをダウンロードすれば、誰でも簡単に利用することができる便利な機能だ。2016年4月、同市を含む10市町村（大和高田市・天理市・山添村・三郷町・安堵町・川西町・三宅町・広陵町・上牧町・河合町）は、ごみ処理施設の設置及び運営等を共同しておこなうことを目的に「山辺・県北西部広域環境衛生組合」を設立。現在、天理市

岩屋町に「新ごみ処理施設（焼却施設）」を2025年5月の稼働開始を目標に整備が進められている。

2. 産業振興への取組み

○「広陵高田ビジネスサポートセンター（通称：ココビズ KoCo-Biz）」を開設

大企業に比べて中小企業・小規模事業者は自身での新製品の開発や販売ルートの開拓、ECサイトの活用が不慣れで、そこに十分な人員を割くことも難しい。そこで同市では、2020年広陵町との連携により「中小企業・小規模事業者支援のための無料経営相談所」として広陵高田ビジネスサポートセンターを開設した。全国に20か所以上存在するBizモデルの支援センターで、奈良県では初となる。個々の企業が持つ強みを活かした経営戦略や課題解決の提案など、ビジネスに関することならどんなことでも何度でも無料で相談できる。市内の企業が活発にKoCo-Bizを利用することにより、さらなる地域経済の活性化と地元での雇用の創出を目指す。



市役所内3階にあるココビズ事務所（左）とロゴマーク（右）

○企業誘致と雇用促進を図った奨励金制度の拡大

さらに同市では市内への企業誘致の推進、また、市内事業者が事業を継続しやすいよう「企業誘致促進奨励金」を2021年4月より一部改正した。同奨励金の内「事業所設置奨励金」は、対象業種をこれまでの商業・工業施設から全業種（一部要件あり）へ拡大させ、さらには事業規模を拡大する目的であれば、既存事業所の建て替え等も対象とした。

また「雇用促進奨励金」は、事業所設置奨励金該当事業者が、開業日90日前後の間に、市内在住者を正規従業員として雇用し、1年以上継続雇用すれば、従業員1人につき20万円（限度額1,000万円）を1回限り交付する。これらの取組みが同市の定住人口の確保や雇用の創出へと結び

つくことが期待されている。

○「大和高田市プレミアム付商品券」を販売

同市では、新型コロナウイルス感染症に関連して影響を受けている市内事業者の支援と、市民の生活支援のために「大和高田市みくちゃんプレミアム付商品券」を2021年10月より額面500円券×10枚=5,000円を1冊1,000円で、全市民を対象として販売（1人あたり1冊まで購入可能）。市民からの反響も大きく、約9割の市民が購入された。



大和高田市みくちゃんプレミアム付商品券

3. 外国語教育と緊急医療への取組み

○リズモー市（オーストラリア）との姉妹都市交流

1952年同市の高田カトリック教会に赴任したオーストラリア・リズモー市出身の神父が同市に幼稚園を建設するため、日豪両国で募金活動を行った。これが発端となり、1963年8月7日、日豪間で日本第1号となる、リズモー市との姉妹都市提携が結ばれた。これまで多くの学生達が交換留学生として両市を行き交い、友好関係を深めている。（現在は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い中止。令和3年度は、市立高田商業高等学校とカディナ高校学生がオンライン交流を実施。）



姉妹都市交流の推進に伴い、同市では子供達への外国語教育にも力を注ぐ。幼いころから英語に親しむ環境を整えるべく、これまで3人だった外国人英語指導助手を2019年より5人に増員し、市立のすべての幼稚園・保育所・こども園をはじめ、小中学校及び市立高田商業高等学校に年間延べ900日派遣している。子供達の発達段階に応じて、外国語だけではなく、外国文化にも触れることができるような取り組みがなされている。

特に市立高田商業高等学校英語部は「全国商業高等学校英語スピーチコンテスト」の全国大会に

出場するなど、同市の英語教育の充実が着実に実を結んでいることが窺え、グローバルな人材育成にさらなる期待が寄せられる。

○医療機関の充実とコミュニティバスの導入

同市は、全国的にみても珍しく、市立の病院と看護専門学校を保有している。1953年の



大和高田市立病院

開設当初は85床の小規模病院だったが、現在は320床にまで増加し、新型コロナウイルス感染症の重点医療機関として、また中和地域の中核病院としての役割を担っている。現在、建て替えが検討されており、自治体病院としての役割はもちろん、救急医療等にも注力した「断らない病院」としての機能を目指している。



また同市では、市民の移動手段としてコミュニティバス「きぼう号」を運行している。市民交流コミュニティバス「きぼう号」センターを乗り継ぎ拠点とし、3台のノンステップバスが誰でも片道100円で利用できる（一部無料）。

バスの運行により、市民生活が向上し中心市街地への賑わい創出が期待されている。

4. 観光振興にかかる取組み

○奥田の蓮取り行事（県指定無形民俗文化財）

1300年を超える歴史をもつ奥田の蓮取り行事は、吉野山金峯山寺の法会「蓮華会」の一連の行事として、毎年7月7日七夕の日に同市奥田の集落で行われ、役行者の母・刀良売にまつわる「ひとつ目蛙」の伝承に深い関わりを持つ。蓮取り舟に乗り、切り取った蓮を修験者的一行が吉野山金



奥田の蓮取り行事の様子

峯山寺・蔵王堂までの道を祠に献じながら進み、蔵王堂での献花の法要を経た後、翌早朝より、大峰山寺への蓮

華奉獻へと続きます。2004年には、奈良県指定無形民俗文化財に指定された。

同市では、毎年蓮取りから吉野山の蛙飛び行事までを観光する「蓮のみちバスツアー」を開催し、知名度の向上を図っている。

○県内有数の桜の名所「高田千本桜」

大中公園を中心に高田川の両岸2.5kmにわたって、毎年3月下旬から4月上旬にかけて見事な桜並木が見られる。「高田千本桜」として市民に親しまれているこれらの桜は1948年に市制施行を記念して市民ボランティアによって植樹されたもので、樹齢70年以上になる木も数多くある。毎年見事な花を咲かせ、夕方にはライトアップされるこの風景は、奈良県景観資産にも選定されており、県内有数の桜の名所としても知られている。護岸工事とともにスロープや遊歩道を整備し、交流人口の促進に力を注ぐ。



見事な桜並木が見られる「高田千本桜」

大和高田市は「子育てに魅力的なまち」として、若い世代の出産希望などの実現を支援するため様々な支援に力を注ぐ。特に妊娠・出産・子育てに対する切れ目のない支援の推進が、若い世代の定住促進に繋がると考え、医療機関や教育の充実に取り組んでいる。堀内大造市長は、「子育てがしやすく、安全で安心なまちづくりを進めることで、『住みたい』『住んで良かった』と感じてもらえるまちにしていきたい。そのためにも市民協働の輪を広げていくことが重要だ」と語る。

（村井 渚、八木陽子）